

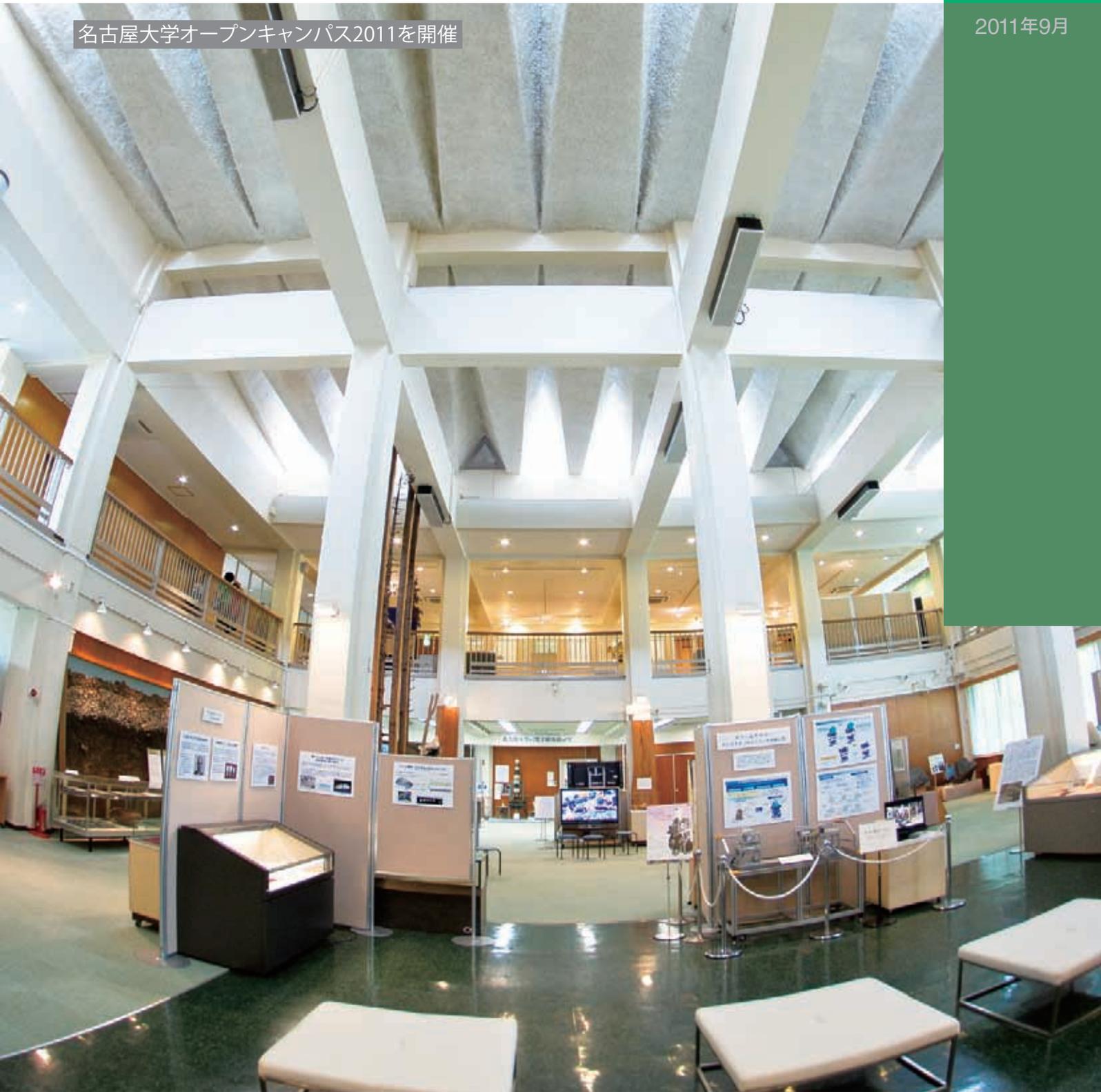
名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.220

2011年9月

名古屋大学オープンキャンパス2011を開催



目次

●ニュース

名古屋大学オープンキャンパス2011を開催	3
高大連携教育プログラム（短期集中型）を実施	4
学術奨励賞授与式を挙げる	5
講演会「ビジネスチャンスを見極める～シリコンバレーの視点」を開催	5
産業技術総合研究所との技術交流会を開催	6
第22回日本数学コンクール及び第15回日本ジュニア数学コンクールを開催	6
ES 館開館記念特別講座ランチョンフォーラムを開催	7
野依良治博士トークセッションを開催	7

●知の先端

ストレス環境条件下での細胞分裂活性の維持に必要なイネの因子を解明 ー植物の環境ストレス耐性機構の新たな理解ー	8
武田 真（生物機能開発利用研究センター准教授）	

●知の未来へ

量子極限・熱的極限に迫る超伝導信号処理回路技術の創成	10
田中 雅光（高等研究院特任助教）	

●部局ニュース

公開セミナー「なかなか大人にならない若者たち」を開催	11
サマースクール「アジアの法と社会2011」を開催	11
化学・生物実験講習会を開催	12
テクノフロンティアセミナーを開催	12
テクノサイエンスセミナー2011を開催	12
平成23年度学術ポータル担当者研修を実施	13
西日本ネットワーク・大阪府による市民公開シンポジウムを開催	13
第41回博物館コンサートを開催	13

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成23年7月16日～8月15日	14
---------------------------------	----

●博物館からのお知らせ

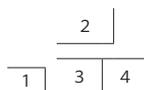
第21回博物館企画展「ミクロの美術館 ～顕微鏡で見た人体の世界～」を開催中	16
---------------------------------------	----

●イベントカレンダー

●ちょっと名大史 とよだ 豊田講堂の有形文化財登録と BELCA 賞受賞	20
---	----

名古屋大学オープンキャンパス2011を開催





- 1 豊田講堂の様子
- 2 ホワイエの様子
- 3 学部紹介の様子
- 4 学部紹介の様子

名古屋大学オープンキャンパス2011が、8月9日(火)から11日(木)の3日間にわたり開催されました。これは、高等学校2年生を中心とした大学進学希望者を対象に、教育・研究における特色の紹介や施設見学等を通じて「名古屋大学で何が学べるか」を紹介し、今後の適切な進路選択をする上での意識を高めてもらうことを目的として、毎年行っているものです。7月中旬から連日30度以上の気温が続いていましたが、蒸し暑い中多くの高校生が参加しました。

学部企画では、学部長をはじめ、教職員・在学生が一体となり、内容に趣向を凝らした学部説明、模擬講義、施設見学等が行われ、参加者は、教員や在学生と直接懇談したり、自分の進路等について詳しく説明を聞き、熱心に質問やメモを取るなど活気にあふれていました。

3日間にわたり開催した全体企画では、参加者や保護者等の方々は豊田講堂で大学紹介ビデオを視聴したり、附属図書館、博物館、野依記念物質科学研究館、赤崎記念研究館、ノーベル賞展示室等のキャンパス内の公開施設を自由に見学したり、博物館ガイドツアーや、生協学生委員による学内ツアーに参加したりしていました。また、豊田講堂ホワイエに設けられた大学スタッフによる入試・就職・課外活動、理系志望の女子学生のための相談ブース、生協学生委員による各学部の現役大学生との交流・相談ブース及び教科書・参考書の展示コーナーにも多くの参加者が訪れ、大学生活に関する様々な相談をしていました。

今年度のオープンキャンパスの開催に当たっては、昨年度の申し込み状況も考慮し、定員を1,100名増員して、7月1日(金)午後3時から携帯電話の

ウェブサイトに参加受付を開始しましたが、昨年以上に申し込みの出足が早く、申込期限までには全ての学部において募集人員(9,320名)に達しました。3日間のオープンキャンパス参加者数は8,334名で、事前申込ができなかった方も、豊田講堂での全体企画や構内見学等に3日間で700名を超える人が訪れ、総数では9,000名を超える方が来学しました。

オープンキャンパス参加者数

8月9日(火)	教育学部	574名
	経済学部	789名
	工学部	1,884名
8月10日(水)	法学部	850名
	医学部(医)	596名
	農学部	506名
8月11日(木)	文学部	710名
	情報文化学部	260名
	理学部	1,258名
	医学部(保)	907名
合計		8,334名

*医学部保健学科は大幸キャンパスで実施しています。



高大連携教育プログラム（短期集中型）を実施



中津川市加子母地区の林業を見学する参加者

「高大連携教育プログラム（短期集中型）－中津川プロジェクト－」が、8月9日(火)から11日(木)までの間、中津川研修センターにおいて実施されました。

同プログラムは、教育学部附属学校協議会の企画によるもので、3日目となる今回も大学院教育発達科学研究科中等教育研究センターと共催し、杉山理事をはじめとする本学教員、植田中等教育研究センター長、大谷附属学校長、附属学校教員及び附属学校同窓生を含む本学の学生も参加して、教育学部附属高等学校1、2年生の16名を対象に行われました。

プログラムは、「よむ・かく・みる・ふれる・ときはなつ」という学習テーマで実施され、5名の本学教員によりロールプレイやグループワークなどの実技を取り入れた講義や実習が行われました。

1日目の高野雅夫環境学研究科准教授が担当した「みる」、「ふれる」では、中津川市役所の協力を得て、中津川市加子母地区を訪問して林業を体験しました。木を伐採する場面から始まり、その「木」が加工されていく様子を製材所で説明を受け、「製品」となる産直住宅までの一連の



大学3年生による「新しい附属学校校舎」のプレゼンテーション



杉山理事の授業風景

流れを見学し、高野准教授からの「加子母地区の林業が成功しているのはなぜか」という問いについて考えました。

杉山理事が担当した「よむ」、「かく」、「みる」では、「まんが」を題材として「表現」には様々な方法があり、その特質を理解することの重要性について説明がありました。「かかれた内容」から情報を十分に読み取るにはどうしたらよいか、次々と出される課題についてグループで取り組みながら、作品についての理解を進めました。

小松 尚環境学研究科准教授が担当した「みる」、「かく」、「ときはなつ」では、工学部で建築を学ぶ3年生8名が行った「新しい附属学校校舎」のプレゼンテーションを題材に、「8名のモデルの中からどれが一番自分にあっているのか」、「自分ならどんなモデルを創るのか」等について、発表した学生も参加してグループで話し合いました。この企画では、初の試みとして本学の学生8名が附属高校生と共に学びました。

安井浩樹医学系研究科寄附講座准教授、青松棟吉助教が担当した「みる」、「ふれる」では、医師の診察場面を想定したシナリオを基に、診察のプロセスを実際に経験し、医師は診察中に何を考えているのかということを知りました。さらに、医師が直面する悩みから、医療倫理の問題まで踏み込んで考えました。今回は、「ファントム」という腹部エコーシミュレータを使用して超音波検査機を体験しました。

また、2日目には生徒による自主企画が行われ、参加した教員らとの交流の中で、「大学で何を学ぶか」、「附属学校の総合学習で何を学ぶか」などについて真剣な討論がありました。

3日間の企画を通じて、普段聞くことのない大学教員や大学生の話を聞き、教科を超えた学問に触れることができ、参加者にとって学問への意識を深める機会となりました。

学術奨励賞授与式を挙行

名古屋大学学術奨励賞授与式が、7月12日(火)、豊田講堂第1会議室において挙行されました。

同賞は、学術憲章に定める「人間と社会と自然に関する研究と教育を通じて、人々の幸福に貢献することを、その使命とする」という基本理念に基づき、本学の大学院博士課程後期課程に入学又は進学した特に優秀、かつ、将来の



記念撮影

有望な学生に対して、その教育研究活動を奨励することを目的として設立したもので、今年度大きく制度の見直しを図り、より研究水準の高さを中心に審査することになりました。

受賞者は大学院博士課程後期課程に在籍する10名で、表彰状及び副賞として学業奨励金80万円が授与されました。

式には、総長をはじめ理事、研究科長、指導教員が列席し、総長からは「大学院生の模範となるような研究生活を送り、自己研鑽に努めるとともに、大学院での生活が、世界へ大きく視野を開き、人類の未来を担う人材として育つ契機となることを願っています。将来を担う皆さんに期待しており、新しい時代を切り拓き、作り出す『高い志』を持ち続けていただきたい」と激励の言葉がありました。

講演会「ビジネスチャンスを見極める～シリコンバレーの視点」を開催

講演会「ビジネスチャンスを見極める～シリコンバレーの視点」が、7月26日(火)、野依記念学術交流館において、名古屋アメリカンセンターとの共催で開催されました。講師のリチャード・ダッシャー スタンフォード大学顧問教授は、同大における大学発ベンチャーの育成や産学連携コーディネータに従事し、シリコンバレーの今日を築いた

立役者の一人として知られています。現在、同大集積システム研究所業務担当所長、アジア・米国技術経営研究センター所長を務めています。

講演会では、本学教職員・学生のほか、他大学教員や一般企業などから80名が参加しました。

まず、渡邊明彦産学官連携推進本部教授からダッシャー顧問教授の紹介があった後、ダッシャー顧問教授は流暢な日本語で、オープンイノベーションという概念の解説を行いました。さらに、イノベーション体系における起業家の役割、シリコンバレーにおけるベンチャーによるイノベーション創出の仕組み、そして将来的にイノベーションが見込まれている分野について、実例を交えながらわかりやすく講演しました。

講演後には質疑応答があり、ダッシャー顧問教授と熱心な参加者との間で活発な議論が行われました。終了後にも多くの参加者が会場に残り、講演者や参加者間でネットワーキングする姿が見られ、充実した講演会となりました。



講演するダッシャー顧問教授

産業技術総合研究所との技術交流会を開催

独立行政法人産業技術総合研究所（産総研）との技術交流会が、7月29日（金）、シンポジオンホールにおいて開催されました。

この技術交流会は、平成19年に締結された連携・協力協定に基づく活動の一環として行われており、今回で通算9回目の開催になります。参加者は産総研と本学関係者を合



会場の様子

わせて61名にのほりました。

開催にあたり、宮田理事、三留秀人産総研中部センター所長から開会のあいさつがあり、続いて今年度の技術シーズを育てるための共同調査研究（FS研究）発表が行われました。産総研と本学の研究者がペアを組んで行った発表では、材料分野を中心に基礎研究に関わる研究成果、実用化へ向けて準備中の研究成果など、多岐に渡る研究が紹介されました。FS研究も5年目を迎え、内容もより充実した発表会となりました。

懇親会では、三留所長による乾杯の発声の後、発表会だけでは時間が足りなかった参加者の間で意見交換が活発に行われ、盛況のうちに閉会しました。

得意分野の技術・研究を互いに補完しながら、両機関の共同研究等における連携の強化が期待される技術交流会となりました。

第22回日本数学コンクール及び第15回日本ジュニア数学コンクールを開催

第22回日本数学コンクール及び第15回日本ジュニア数学コンクールが、8月7日（日）、名古屋・大阪・三重・和歌山の4会場において開催されました。

今年新たに会場として加わった和歌山県橋本市での開催は、多変数関数論の研究で世界的に有名な岡 潔博士（1901～1978）を顕彰する事業の一環として実現しました。



「スイカのしぼり方」の問題に取り組む参加者

同コンクールは、中・高校生を対象に、新しい科学と技術の開拓を担う夢とロマンを秘めた青少年の発掘、伸長を図ることを目的に開催しています。平成2年から「日本数学コンクール」を、同9年から「日本ジュニア数学コンクール」を行っており、昨年度からは、大学企画として開催しています。

今年度の課題は、両コンクールとも共通問題として、「単位分数の和」、「復興拠点」、「すごい約分」、「スイカのしぼり方」の4題が出題され、小・中・高校生約188名が、楽しみながら難しい数学の問題に取り組みました。

審査員により論理性や着眼点などが審査され、11月3日（木）に表彰式が予定されています。

ES 館開館記念特別講座ランチオンフォーラムを開催

ES 館開館記念特別講座ランチオンフォーラムが、8月1日(月)から3日(水)までの3日間、野依記念物質科学研究館において、高等研究院アカデミーサロンの一環として開催されました。

これは、高等研究院がES 総合館の開館を記念して開催したもので、「不斉とは?～基礎講座～右手と左手の分子



参加者と議論する野依特別教授

たち」と題して行われました。

初日は、大矢 恵社会貢献人材育成本部ビジネス人材育成センターサイエンス・コミュニケーターの司会のもと、野依良治特別教授が、抽選で選ばれた高校生と大学生計17名と一緒に昼食を取りながら自由に議論しました。野依特別教授は参加者に、自分が新しい問題を作り、解いていくことの重要性を語りました。また、生きている実世界のすべてを体感・理解し、「暗黙知」を身に着けることの大切さも強調しました。最後に、「青春を賭けて、やりがいがあることにぜひ挑戦しなさい」と参加者にエールを送りました。

2日目は、斎藤 進理学研究科准教授が「分子の右と左：野依教授の足跡と化学で挑む21世紀の重要課題」、また3日目は、中 寛史物質科学国際研究センター助教が「不斉合成の最先端 + α 」と題して講義をしました。最後に、近藤高等研究院長が、3日間通して参加した参加者に野依特別教授の直筆サインが入った修了書を授与しました。参加者からは、「人生で2度とないぐらいすごい経験だった」、「大変感動した」との感想が多く寄せられました。

なお、この模様は新聞記事として取り上げられました。

野依良治博士トークセッションを開催

野依良治博士トークセッション「野依先生に聞いてみよう」が、8月11日(木)、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて、高等研究院アカデミーサロンの一環として開催されました。

これは、若い世代を主な対象とし、高等研究院アカデミー会員と直接に触れることを通じて、科学の力と魅力、また社会に対する貢献について理解してもらう機会として実施しており、中・高校生や一般の方等約80名が参加しました。



会場の様子

トークセッションは、野依良治特別教授が、事前に募集した質問事項に答える形式で行われました。

まず、近藤高等研究院長からあいさつがあった後、野依特別教授が、参加者に「科学」の社会における役割と重要性を強調しました。さらに、野依特別教授の近著のタイトルでもある「事実は真実の敵なり」との考えを紹介し、最後に、「世界のリーダーを目指して、エネルギー問題などグローバルな問題にぜひ挑戦してほしい」と参加者を激励しました。



質問に答える野依特別教授

参加者からは、「科学の魅力を感じた」、「感動した」との感想が多数寄せられ、大変有意義なものとなりました。

なお、この模様は新聞記事として取り上げられました。

ストレス環境条件下での細胞分裂活性の維持に必要なイネの因子を解明 —植物の環境ストレス耐性機構の新たな理解—

武田 真 生物機能開発利用研究センター准教授

植物は動物のような移動能を持たないため、生育環境に適応するための様々なシステムを獲得しています。温度や湿度が大きく変化した時や土壌の塩濃度が高くなった場合など、ストレス環境下におかれた際に、高等植物がその生育を維持するためには、成長点あるいはメリステムと呼ばれる組織の活性を維持することが重要となります。これは、植物の胚発生後の成長が頂端あるいは側性の分裂組織の活性に大きく依存するからです。多くの植物は、展開した成熟葉が枯れてしまっても、メリステムでの細胞分裂と、それに引き続いて起きる細胞分化とによって、地上部の殆どの組織を再生させることができます。また、イネやコムギのような単子葉穀物では、地上部の基部組織より生える根が根系の多くを占めるため、大部分の植物組織が地上部のメリステムからつくられます。

メリステムは、分裂活性の低い未分化な幹細胞と、新たな細胞を供給する分裂活性の高い細胞により形成されます。メリステムの細胞は分裂することで増加し、分化が進むことで減少しますが、分裂により供給される細胞の数が、分化していく細胞の数を下回ると、メリステム細胞の減少や喪失が起こり、成長できなくなります。したがって、植物がメリステムの機能を維持するためには、細胞の分裂が分化と協調して起きることが重要となります。しかしながら、細胞の分裂活性がストレス環境条件下でどのように維持されるかについては、これまで殆ど理解されていません。

私たちは、塩ストレスや低温、高温ストレスに高い感受性を示す劣性のイネ変異体 *rice salt sensitive 1* (*rss1*) に着目して研究を進めています。この変異体では、トランスポゾンという遺伝因子が *RSS1* 遺伝子に挿入されているため、正常

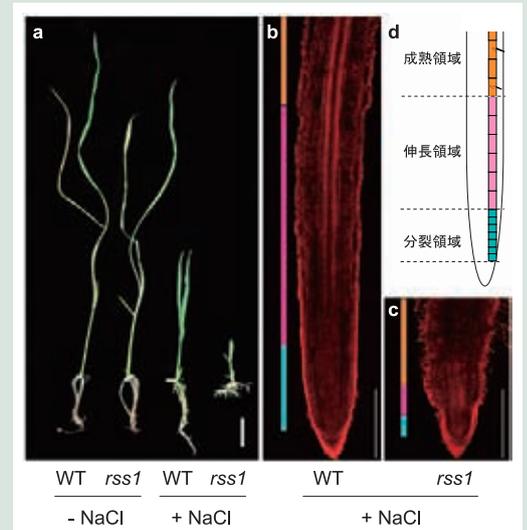


図1 *rss1*変異体は、高い塩ストレス感受性を示す。(a) 150 mM NaClを含む、または含まない培地で生育させた野生型(WT)と *rss1*変異体の種子根の先端部。蛍光色素で染色し、共焦点レーザー顕微鏡を用いて観察した。(b, c) 150 mM NaClを含む培地で生育させたWTと *rss1*変異体の種子根の先端部。蛍光色素で染色し、共焦点レーザー顕微鏡を用いて観察した。(d) 根端の領域の模式図。それぞれ、細胞が盛んに分裂する領域、細胞が伸長する領域、細胞伸長が止まり細胞の成熟する領域を示す。スケールバーは2 cm (a) と500 μm (b, c) を示す。

なRSS1タンパク質をつくることができません。*rss1* 変異体は、通常の生育条件下では野生型と同様に生育するものの、高濃度の塩の存在下では顕著な生育阻害を呈します(図1)。塩ストレス存在下で生育させた *rss1* 変異体の根端組織を観察すると、細胞分裂の盛んな分裂領域や細胞伸長の起こる伸長領域において、野生型よりも細胞数が少ないことがわかりました。このような現象は、細胞分裂阻害剤の存在下で野生型イネを生育させたときにも起こります。したがって、RSS1はストレス環境下での細胞の分裂活性の維持に必

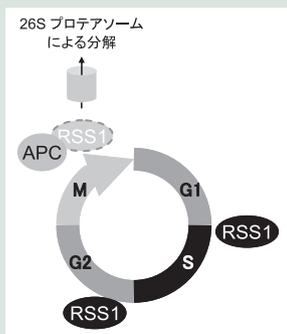


図2
RSS1の細胞周期に依存した分解。M期からG1期にかけて、RSS1はAPC複合体を介した分解経路に入る。S期：DNA合成期。M期：細胞分裂期。

要であると考えられました。実際、*RSS1* 遺伝子の転写活性は分裂細胞で特に高く、RSS1タンパク質は細胞周期の時期に依存して分解されます(図2)。これらのことは、RSS1の機能が細胞分裂活性と深く関わることを示唆しました。

塩ストレス存在下で生育させた *rss1* 変異体の地上部の分裂組織を調べると、細胞分裂時に発現する多くの遺伝子の発現量が野生型よりも低下していることがわかりました。また、細胞周期のDNA合成期や、G2期から分裂期に発現する遺伝子の発現する組織が縮小し、発現する細胞の数も減少していました(図3)。これら2つの細胞周期マーカー遺伝子の発現する細胞が、いずれも *rss1* 変異体で減少していたことから、RSS1がG1期からDNA合成期への移行に重要な役割をもつと考えられました。さらにまた、RSS1がタンパク質脱リン酸化酵素(PP1)の触媒サブユニットと結合することもわかりました。これらのことから、RSS1は何らかの調節タンパク質のリン酸化状態の制御を介して、ストレス環境下での細胞分裂活性を維持すると推定しています[1]。

地球環境の変化やバイオ燃料の需要増は世界の食糧供給に影響を及ぼし始めているといわれてい

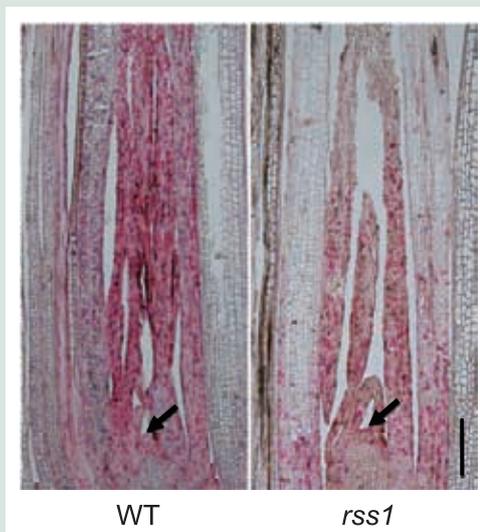


図3 150 mM NaClを含む培地で生育させた野生型(WT)と *rss1* 変異体の地上部の基部組織における細胞周期マーカー遺伝子の発現。赤色はDNA合成期(S期)で特異的に発現する *Histone H4* 遺伝子、紫色はG2期から分裂期(M期)にかけて特異的に発現する *Cyclin B2* 遺伝子の発現をそれぞれ示す。固定処理した組織切片中のmRNAを *in situ* ハイブリダイゼーション法によって検出した。矢印は頂芽メリステムの位置を示す。スケールバーは200 μ mを示す。

ます。一方、地球上の耕作可能な土地は限られているので、将来にわたって安定した食糧供給を続けることが困難になる可能性があります。こうした問題の解決のための知的基盤として、植物の環境ストレス耐性機構のさらなる解明に期待がもたれています[2]。

[1] D. Ogawa *et al.*, *Nature Communications* **2**, 278. doi: 10.1038/ncomms 1279 (2011).
[2] S. Takeda and M. Matsuoka, *Nature Review Genetics* **9**, 444–457 (2008).

1989年 名古屋大学農学部農芸化学科 卒業
1991年 名古屋大学大学院農学研究科博士前期課程 修了
1994年 名古屋大学大学院農学研究科博士後期課程 満期退学
1994年 農業生物資源研究所 COE 特別研究員
1995年 博士(農学)の学位取得(名古屋大学)
1999年 生物系特定産業技術研究推進機構 博士研究員
2002年 農業生物資源研究所 博士研究員
2002年 Friedrich Miescher Institute (スイス) 博士研究員
2003年 ジュネーブ大学(スイス) 助手
2005年 名古屋大学生物機能開発利用研究センター 助教授
2007年 名古屋大学生物機能開発利用研究センター 准教授
モットー：徳随量進、量由識長(徳は量に随って進み、量は識に由りて長ず)。

たけだ しん



田中 雅光
 高等研究院特任助教

量子極限・熱的極限に迫る超伝導信号処理回路技術の創成

極低温で電気抵抗がゼロになる超伝導現象が発見されて、今年でちょうど100年になります。超伝導体でリングを作ると、輪の中を通る磁束は量子化されることが知られており、その有無をイチとゼロに利用することにより計算を行う回路（単一磁束量子回路）を構成することができます。単一磁束量子回路は、消費電力が極めて低く、また、簡単な回路では100ギガヘルツを超える高速動作が実証されており、将来のコンピュータを構成する次世代集積回路として期待されています。

単一磁束量子回路は、従来の回路とは物理的な動作原理が異なり、特に、回路中を高速で飛び回る微弱な磁気信号を精密に制御するという離れ業が必要なため、設計は格段に難しくなります。作製ばらつきやノイズへの対策、効率的な設計手法の確立などを進め、現在、1万個以上の素子を集積した単一磁束量子回路が動作実証に至っています（図1）。

最近、コンピュータシステム全体の消費電力削減や、高性能超伝導センサアレイの信号処理応用に向けた要求から、単一磁束量子回路を更に低消費電力化することが求められています。昨年7月より、名古屋大学若手育成プログラム（YLCプログラム）の採択を受け、単一磁束量子回路の消費電力を極限まで削減する研究を開始しました。従来の設計指針を見直すことによ

り、動作速度とのバランスをとりながら1/10から1/100程度に消費電力を削減することに成功しました（図2）。今後は更に回路構成を検討し、物理的極限に迫ることができるか挑戦したいと考えています。

4月より、米国カリフォルニア大学バークレー校に留学しています。ここでは各国から来た研究者に出会い、とても刺激を受けます。また、研究だけでなく、実際に生活をしてみると、食料や物価、医療など、日本の生活を見つめ直す契機にもなっています。留学に協力してくれている家族に感謝しつつ、知見を広め、研究を進めたいと思います。

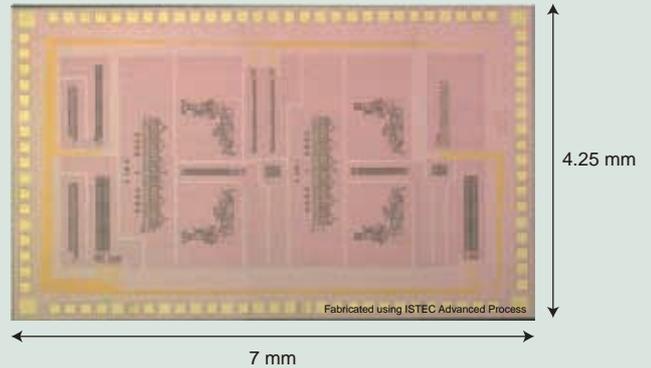


図1 単一磁束量子回路によるスーパーコンピュータ用アクセラレータの試作チップ。11458個の超伝導素子を集積し、4つの演算ユニットが再構成可能なネットワークで接続されている。45ギガヘルツの動作を確認。



図2 従来の1/100に消費電力を削減した単一磁束量子回路（8ビットシフトレジスタ）。20ギガヘルツ以上の動作を確認。

公開セミナー「なかなか大人にならない若者たち」を開催

●発達心理精神科学教育研究センター

発達心理精神科学教育研究センターは、7月30日(土)、公開セミナー「なかなか大人にならない若者たちー成人形成期 Emerging adulthood の意識とアイデンティティ形成、イタリアの場合」を開催しました。今回は、クロセッティ・エリザベッタ ミラノ・ピッコカ大学研究員を招いて行われ、本学学生や学外の心理・教育関係者など約30名が参加



説明するクロセッティ研究員

しました。

前半の講演では、クロセッティ研究員によりイタリアで行われた研究について報告がありました。大学生と労働者の双方を調査したところ、アイデンティティ形成において、大学生は政治への関与の大きさが関連しているのに対して、労働者ではより宗教への関与の大きさが関連していることなどが示されました。そして、アイデンティティの形成や大人になることに関しては、文化的文脈を重要視する必要があること、個人内の適応や対人関係における適応と相互に関連しあっていることの重要性が指摘されました。

後半の討論では、京都大学大学院生の畑野 快さん、本学大学院生の杉浦祐子さん、白井利明大阪教育大学教授、金子一史同センター准教授の4名が、指定討論者として質疑応答を行いました。会場からの意見に加えて、指定討論者より日本でのフリーターや就職活動の現状についての情報も提供され、青年のアイデンティティ形成に関連する要因などについて、有意義な討論が行われました。

サマースクール「アジアの法と社会2011」を開催

●大学院法学研究科、法政国際教育協力研究センター

大学院法学研究科及び法政国際教育協力研究センターは、8月8日(月)から10日(水)の間、神戸大学大学院国際協力研究科、慶應義塾大学大学院法務研究科、法務省法務総合研究所との共催で、サマースクール「アジアの法と社会2011」を開催しました。

次世代のアジア諸国法研究者や法整備支援の担い手を育



会場の様子

成するための連携企画「パワーアップサマー2011」の一環として開催されたこのサマースクールは、アジアの法と社会を学ぶことの意味、法整備支援をめぐる理論動向、法律実務家がアジア法整備支援に関わることの意義などについて、国内外の専門家を招へいして集中講義を行い、参加者が基礎知識や研究方法論を習得するとともに、次世代の若手研究者、実務家が出会い、ネットワークを形成する場となることを目指して、平成21年度から始めたものであり、今回で第3回目となります。

3日間で87名の受講者が参加しましたが、その半分が他地域の大学からの参加者でした。講義後には、懇親会やバーベキューなどが行われ、受講者間の交流が進んだことにより、最終日の全体討論で非常に活発な議論が展開されました。

同スクールが今後も継続されていくことで、当該分野に関する若手研究者・実務家の育成の場として一層発展していくことが期待されます。

化学・生物実験講習会を開催

●工学部



実験に取り組む参加者

工学部は、8月8日(月)、同学部化学・生物工学科の各実験室等において、化学・生物実験講習会を開催しました。

この講習会は高校生を対象に、応用化学、分子化学工学、生物機能工学の学問と研究について、実験を通じて教員や大学院生と交流する中で、大学で化学を学ぶことの面白さを体感してもらうことを目的に、毎年この時期に開催しています。今回は、応募者が定員を大幅に超えたため、抽選により24の高等学校から73名の高校生が参加しました。

参加者は「光で高分子を重合しよう」、「排ガスからCO₂を分離しよう」、「遺伝子を見る・切る・増やす」など12の実験課題の中から自ら選択したテーマについて、午前と午後1回ずつ2つの実験に取り組みました。教員や大学院生の指導のもと、参加者自らがピペットで溶液を取り、目の前で反応が進む驚きを体験して、化学に対する興味が深まったようでした。

テクノフロンティアセミナーを開催

●工学部



課題に取り組む参加者

工学部は、7月29日(金)、同学部電気電子・情報工学科の各学生実験室等において、テクノフロンティアセミナー「触れてみよう、電子と情報の最先端に」を開催しました。

このセミナーは、電気電子・情報分野の最先端の研究を直接体験し、工学の面白さを理解してもらうことにより、近年の若年層の理工系離れを少しでも解消することを目的に、毎年この時期に高校生を対象に開催されています。今年度は東海地方を中心に18の高等学校から28名の参加がありました。

参加者は、「電子ブロックで体験する物理と研究最前線」、「エコロジーな発電装置を作ろう!」など6つの実験課題の中から各自が選んだ課題について、同学科の教員や大学院生とのアドバイスのもと、試行錯誤を繰り返しながらも、熱心に製作・実験に取り組みました。参加者は教員や大学院生との交流や大学施設の利用を通じ、大学生活を実感する充実した一日を過ごせたようでした。

テクノサイエンスセミナー2011を開催

●工学部



集合写真

工学部は、8月10日(水)、同学部物理工学科の各研究室において、テクノサイエンスセミナー2011「物理の世界にあそぶ」を開催しました。

このセミナーは、物理工学科に関連した基礎分野・最先端分野の講義と体験実験を通して、大学での教育・研究に触れ、大学で理工学を学ぶ面白さを体感してもらうことを目的に、高校生を対象に開催しているもので、今年度は東海地方を中心に70名を超える高校生が参加しました。

体験実験では、「光るガラスを作ろう!」など、物理から化学に及ぶ広範な内容の10テーマから各自の選んだ1つのテーマについて、教員や大学院生のアドバイスの下、大学内での最新の設備などを使い、自ら考え、手を動かし、熱心に実験に取り組みました。体験実験後に行われた交流会にも多数の高校生が参加し、高校生と大学教員・大学院生とが語り合っている姿もあちらこちらで見られ、実験のみならず、大学生活を実感できたようでした。

平成23年度学術ポータル担当者研修を実施

●附属図書館



プレゼンテーションの様子

附属図書館は、8月3日(水)から5日(金)の3日間、国立情報学研究所(NII)との共催により、平成23年度学術ポータル担当者研修を実施しました。8回目となる今年度は、テーマを従来の「学術機関リポジトリ」から「Web技術を活用した学術情報の提供・発信サービス」とし、これらの企画立案の能力開発を目的として開催され、全国の国公私立大学及び研究機関26機関28名の職員が参加しました。

アカデミック・リソース・ガイド株式会社の岡本 真氏の進行により、講義及びグループ討議が行われ、グループ討議では、Twitterなどのソーシャルサービスや次世代総合目録サービス、「カーリル」に見られる大規模データベース等を課題とし、受講者及び講師がグループに分かれ、討議しました。また、図書館長に提出したWebサービスの企画書が却下されたという想定で、受講者が仮想の図書館プロジェクトチームとしてプレゼンテーションを行い、再検討などを経て「承認」を得るというプロセスも経験しました。一体感のある大変有意義な実践的研修となりました。

西日本ネットワーク・大阪府による市民公開シンポジウムを開催

●大学院医学系研究科



会場の様子

大学院医学系研究科は、7月26日(火)、大阪市ドーンセンターにおいて、がんプロフェッショナル養成プラン西日本ネットワーク・大阪府による市民公開シンポジウムを開催しました。

同シンポジウムは、「あなたのがん治療は、どうやってきまるの?」をテーマに、一般の方を対象として開催したもので、文部科学省からの祝辞、大阪対がん協会会長による「がん医療の現状の課題と将来展望」と題した講演、同養成プランの関係教員によるパネルディスカッション、個別相談会、さらに、西日本地区の8拠点によるポスターセッションが行われました。

当日は、約200名の参加者がありました。参加した一般の方々に、パネルディスカッション及びポスター展示を見てもらうことにより、同養成プラン自体の目標である「他職種の人材育成の重要性」を認識してもらうことができた大変有意義な機会になりました。

第41回博物館コンサートを開催

●博物館



合奏に手拍子を打つ聴衆

博物館は、8月6日(土)、同館展示室において、第41回博物館コンサートを開催しました。

今回は、「リズムを刻もう1.2.3」と題し、フルートやピッコロにマリンバ、ドラムなどの打楽器によるグループ「フルリン打」の演奏を行いました。夏休み期間とあって、子どもにも楽しめる映画音楽や懐かしい曲を集めた「日本の四季の歌メドレー」など、バラエティーに富む全10曲が披露されました。

特に、博物館所蔵のサヌカイトという四国の石で、特別に今回のために製作された石琴の演奏は、その澄んだ音色が聴衆を魅了しました。また今回は、足立 守博物館特任教授による「なぜサヌカイトは良い音が出るか」についての解説もありました。100名を超す聴衆が、奏者と一体になった「ペットボトルのマラカス」や「手拍子」による合奏は、大変好評を博しました。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年7月16日～8月15日]

記事	月日	新聞等名
1 山澤弘実工学研究科教授は放射性物質を含むえさを食べた牛肉が出回ったことに関して「問題の稲わらを与えた牛肉数百グラムを1、2回食べても健康には影響がない量だ」と話す	7.16 (土)	中日 (朝刊)
2 講演会「ビジネスチャンスを見極める」開催：26日 野依記念学術交流館にて	7.16 (土)	朝日 (朝刊)
3 本学は2013年春をめどに「次世代複合材技術確立支援センター」を設立する	7.16 (土)	日経 (朝刊) 朝日 (朝刊)
	7.18 (月)	日刊工業
	7.20 (水)	中日 (朝刊)
4 井口哲夫工学研究科教授は放射性物質を含むえさを食べた牛肉が出回ったことに関して「問題の稲わらを与えた牛肉を食べても、健康には影響がないと考えられる」と話す	7.16 (土)	中日 (夕刊)
5 鈴木康弘環境学研究科教授ら 浜岡原子力発電所の真下を通る巨大な活断層が存在する可能性を指摘	7.17 (日)	中日 (朝刊)
6 第93回全国高等学校野球選手権愛知大会：教育学部附属高等学校は内海高等学校に9-1で勝利、小牧高等学校に0-10で敗れる	7.17 (日)	中日 (朝刊)
	7.19 (火)	読売
7 西堀英治工学研究科准教授ら “姉妹” 光子の共同作業で観察波長の限界を突破—物質を調べる波長と分解能を決定する波長を分離する手法を考案する	7.18 (月)	日経 (朝刊) 他2社
8 現代日本訳百科 (464)：「きめ細やか」な対応 町田 健文学研究科教授	7.18 (月)	中日 (朝刊)
9 現代日本訳百科 (465)：「震災に鑑み」行事を中止 町田 健文学研究科教授	7.19 (火)	中日 (朝刊)
10 安川寿之輔本学名誉教授は18日、名古屋経済大学付属市邨高等学校で近代史の講演を行う	7.19 (火)	中日 (朝刊)
11 「全国国公立・有名私大相談会2011」開催：16日 本学学生が相談員として参加、受験生にアドバイスする	7.19 (火)	中日 (朝刊)
12 中日文化センター新講座：「漢文を楽しむ—『十八史略』の世界に遊ぶ」竹内弘行本学名誉教授	7.19 (火)	中日 (夕刊)
13 現代日本訳百科 (466)：「余すところなく網羅」町田 健文学研究科教授	7.20 (水)	中日 (朝刊)
14 第二回 NAGOYA からのニッポン復活応援シンポジウム「震災時の安全コミュニケーションと地域復興」開催：8月3日 隈本邦彦環境学研究科客員教授が講演	7.20 (水)	日経 (朝刊)
15 中日文化センター特別講座「もう一度学ぶ地震と津波のしくみ—東海・東南海・南海地震研究の最前線」開催：8月3日 山岡耕春環境学研究科教授が講演	7.20 (水)	中日 (夕刊)
16 本学は福島第一原子力発電所の事故について外国人留学生を対象とした説明会を開催する	7.21 (木)	読売
17 現代日本訳百科 (467)：「大連立はへったくれもない」町田 健文学研究科教授	7.21 (木)	中日 (朝刊)
18 名大カフェ Science, and Me 第13回「見たい！知りたいたい！どこまでも！野生動物が見る世界」開催：8月3日	7.21 (木)	中日 (朝刊)
19 本学は2012年度の入学者選抜要項を発表する	7.22 (金)	中日 (朝刊)
20 濱口総長が本部員を務める中京独立戦略本部に自民党を中心とする名古屋市議会が異議を唱え、宙に浮いた状態となる	7.22 (金)	朝日 (朝刊)
21 松岡良樹理学研究科 COE 特任助教のグループ 宇宙の真の明るさを計測	7.22 (金)	日刊工業
22 本学が参加する「産学協働人材育成円卓会議」が東京都内で開催される：27日	7.22 (金)	読売 日経 (朝刊)
23 本学は民間が実施した調査の結果、東海地方の高等学校生が受けたい大学1位となる	7.22 (金)	日経 (朝刊)
24 夏休み小学5、6年生向けイベント『「ハスの葉のすこい」を顕微鏡でのぞいてみよう 水がコロコロころがる表面」開催：8月5日	7.22 (金)	朝日 (朝刊)
25 川崎浩司工学研究科准教授は浜岡原子力発電所の津波対策の工事について「万全とは言い切れないので臨機応変に追加的な対策を講じることが求められる」と話す	7.23 (土)	朝日 (朝刊)
26 内田 良教育発達科学研究科准教授は中学・高等学校での柔道による死亡事故について解説する	7.23 (土)	朝日 (朝刊)
27 「認知症予防フォーラム」開催：8月6日 梅垣宏行医学部附属病院助教が話す	7.23 (土)	朝日 (朝刊)
28 「第一回高校生夏休み国際理解教育特別講座」開催：21、22日 加藤延夫本学名誉教授が話す	7.23 (土)	中日 (朝刊)
29 第1回「サイエンスバブ in 名古屋」開催：27日 内藤博之理学研究科 COE 研究員が話す	7.23 (土)	中日 (朝刊)
30 本学などから専門医を呼び診療体制を整えている名古屋市のやまね病院の取組みが紹介される	7.23 (土)	中日 (朝刊)
31 名古屋大学ラジオ公開講座「夢見た今と夢見る未来」第4回目「グローバル時代の物流・ロジスティクス・サプライチェーン」：24日 高桑宗右工門経済学研究科教授が話す	7.24 (日)	中日 (朝刊)
32 教育学部附属中学・高等学校が国連教育・科学・文化機関憲章の理念を実践する「ユネスコスクール」に加盟していることが紹介される	7.24 (日)	読売
33 現代日本訳百科 (468)：1万メートルの「高さで飛ぶ」町田 健文学研究科教授	7.25 (月)	中日 (朝刊)
34 「高校生防災セミナー」開催：25、26日 鈴木康弘環境学研究科教授などが話す	7.26 (火)	中日 (朝刊)
35 山澤弘実工学研究科教授は放射性セシウムに汚染された稲わらが肉牛に与えられていた問題について「しっかりと流通をコントロールし汚染の広がりを食い止めるべき」と話す	7.26 (火)	読売
36 秋山真一医学系研究科特任講師ら 金魚を使った新しい抗体の生産技術を開発	7.26 (火)	日刊工業
37 鈴木まり子さん、河村知拓さん本学学生と稲垣佐也加さん本学大学院生は中日新聞「学生之新聞」の特集「聴覚障害の支援 震災で広域化」の学生取材スタッフを務める	7.26 (火)	中日 (朝刊)
38 現代日本訳百科 (469)：「アクセスが向上」する 町田 健文学研究科教授	7.27 (水)	中日 (朝刊)
39 医学部附属病院は培養骨髄で骨を伸ばす治療法を確立し、再生医療としては全国で初めて厚生労働省の評価会議で高度医療対象技術に承認される	7.27 (水)	中日 (朝刊) 他2社
	8. 8 (月)	朝日 (夕刊)
40 本学と株式会社デンソーは連携し11月に若手社員の人材育成プログラムを導入する	7.28 (木)	日刊工業
41 現代日本訳百科 (470)：「メールを届ける」町田 健文学研究科教授	7.28 (木)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年7月16日～8月15日]

記事	月日	新聞等名
42 山澤弘実工学研究科教授は肉牛の餌として全国に流通した稲わらが放射性セシウムに汚染されていた問題について「流通した事実が問題」と話す	7.28 (木)	中日 (朝刊)
43 博物館コンサート「リズムを刻もう 1・2・3」開催：8月6日	7.28 (木)	中日 (朝刊)
44 本学など東海地域の10大学と連携している名古屋産業科学研究所は東海地域の大学の研究成果有体物を拡販する	7.29 (金)	日刊工業
45 本学は東海・東南海・南海の三連動地震に備え、津波浸水予測に向け三重県と共同研究に取り組む	7.29 (金)	読売
46 ミクロの探検隊「組織」開催：8月24日	7.29 (金)	読売
	7.30 (土)	中日 (朝刊)
47 ミクロの探検隊「昆虫」開催：8月25日	7.29 (金)	読売
	7.30 (土)	中日 (朝刊)
48 清涼茶会開催：8月5日 本学学生などによる松尾流大学茶道「紫親会」が主催	7.30 (土)	中日 (朝刊)
49 「第八回中央日本交流・連携サミット」開催：29日 平野真一前総長がコーディネーターを務める	7.30 (土)	中日 (朝刊)
50 本学などのヨット部が津波被害にあった東北大学のヨット部を支援する	7.30 (土)	中日 (夕刊)
	8. 2 (火)	朝日 (朝刊)
51 名古屋大学ラジオ公開講座「夢見た今と夢見る未来」第5回目「『時空の抜け道』ワームホールは実在するだろうか?」：31日 阿部文雄太陽地球環境研究所准教授	7.31 (日)	中日 (朝刊)
52 中東正法文学研究科教授のゼミが「日経 TEST 学生団体対抗戦」で1位となる	7.31 (日)	日経 (朝刊)
53 現代日本誤百科 (471)：「中央線はお乗り換えです」町田 健文学研究科教授	8. 1 (月)	中日 (朝刊)
54 フランス学士院連携外国人会員に選ばれた佐藤彰一文学研究科特任教授のプロフィールが紹介される	8. 1 (月)	中日 (朝刊)
55 竹内恒夫環境学研究科教授は脱原発、脱温暖化の道筋を提案する	8. 1 (月)	中日 (朝刊)
56 護 雅史環境学研究科准教授は「東海・東南海・南海の三連動地震で推定される長い周期の揺れは、愛知県で東日本大震災の5倍になる可能性がある」と分析する	8. 1 (月)	中日 (朝刊)
57 本学の今年度オープンキャンパス 多数の参加枠を設けたにも関わらず、締切日前に満員となる	8. 1 (月)	中日 (朝刊)
58 その跡地が本学の研究施設などになっている豊川海軍工廠への空襲の悲惨さを伝える演劇が上演される	8. 1 (月)	日経 (夕刊)
59 野依良治本学特別教授はランチョンフォーラムに参加した学生に「人と違うことをしなければノーベル賞はもらえない。人と違うことを貫くには思い入れが必要」と語りかける	8. 2 (火)	中日 (朝刊)
60 現代日本誤百科 (472)：「全力疾走で完成」させる 町田 健文学研究科教授	8. 2 (火)	中日 (朝刊)
61 本学と東海光学株式会社の「反射防止性を有する耐摩耗性に優れた超はっ水性光学レンズ」が平成23年度「愛知テクノテックものづくりクラスター成果活用促進事業」に採択される	8. 2 (火)	日刊工業
62 阿部まゆみ医学部保健学科特任講師はがん患者の創作活動について「治療が終わってもがん患者には心の痛みが残っている。言葉やモノづくりで表現することが、癒しにつながる」と話す	8. 2 (火)	中日 (朝刊)
63 現代日本誤百科 (473)：「打撲により内臓に欠陥が出た」町田 健文学研究科教授	8. 3 (水)	中日 (朝刊)
64 渡慶次 工学研究科准教授「堀場雅夫賞」を受賞	8. 3 (水)	日刊工業
65 福和伸夫環境学研究科教授は講演で中部の災害への備えについての危機意識の低さに警鐘をならす	8. 3 (水)	日経 (朝刊)
66 平成23年度第2回地球教室－親子対象フィールドセミナー－「砂の中から宝石をさがそう！」開催：27、28日	8. 3 (水)	中日 (朝刊)
	8. 5 (金)	読売
67 飯島澄男本学特別招へい教授はカーボンナノチューブの実用化研究について語る	8. 4 (木)	日刊工業
68 現代日本誤百科 (474)：「おかわりが」何杯でも「いける」町田 健文学研究科教授	8. 4 (木)	中日 (朝刊)
69 生源寺真一生命農学研究科教授は日本の農業の復興のカギについて語る	8. 4 (木)	中日 (朝刊)
70 「防災・減災シンポジウム～東日本大震災から学ぶ災害医療と地域連携～」開催：9月3日	8. 4 (木)	朝日 (朝刊)
71 日本教育心理学会公開シンポジウム開催：27日 金井篤子教育発達科学研究科教授が話す	8. 5 (金)	読売
72 「親子で考える環境問題～公開講座 in 名古屋大学2011」開催：28日	8. 6 (土)	日経 (朝刊)
73 本学の学生食堂でヘルシーメニューをアフリカの子どもの給食への寄付金付きで販売する「テーブル・フォー・ツー」が実施されていることが紹介される	8. 6 (土)	中日 (朝刊)
		Risa
74 第55回中京大学全国学生書道展：矢野水名愛さん教育学部附属中学校生が文学部長賞を受賞	8. 6 (土)	中日 (朝刊)
75 現代日本誤百科 (475)：「大相撲を見届けて」ください 町田 健文学研究科教授	8. 8 (月)	中日 (朝刊)
76 本城秀次発達心理精神科学教育研究センター教授は「(子ども時代の) この年代で受けたいじめ被害は、ひきこもりや社会への適応障害につながる大きな要素になる」と指摘する	8. 8 (月)	日経 (朝刊)
77 「第15回日本ジュニア数学コンクール」「第22回日本数学コンクール」開催：7日	8. 8 (月)	中日 (朝刊)
78 学生之新聞：ゴミ袋持参で海遊びを楽しむむ田村洗樹さん本学学生の取り組みが紹介される	8. 9 (火)	中日 (朝刊)
79 現代日本誤百科 (476)：「白熱の投げ合い」町田 健文学研究科教授	8. 9 (火)	中日 (朝刊)
80 現代日本誤百科 (477)：「『消したかな』あなたを守る合言葉」町田 健文学研究科教授	8.10 (水)	中日 (朝刊)
81 ニコラ・ポーメル教養教育院特任准教授が渋沢・クローデル賞フランス側本賞を受賞	8.10 (水)	読売
82 現代日本誤百科 (478)：「最近人気を呼ぶ温泉」町田 健文学研究科教授	8.11 (木)	中日 (朝刊)
83 本学は全学同窓会の台湾支部を設立する	8.11 (木)	日刊工業
84 山澤弘実工学研究科教授は日本原子力学会放射線影響分科会に気象庁などのデータを基に原子力発電所からの放射性物質の放出率などを独自に加えたシミュレーションを報告する	8.11 (木)	朝日 (朝刊)
85 赤崎 勇本学特別教授がエジソン賞を受賞	8.12 (金)	毎日 (朝刊)
		他4社
86 名古屋大学オープンキャンパス特別企画「野依良治博士トークセッション『野依先生に聞いてみよう』」開催：11日	8.12 (金)	中日 (朝刊)
87 防災・減災：福和伸夫環境学研究科教授は歴史に学ぶ地震と教訓について語る	8.12 (金)	読売

記事	月日	新聞等名
88 第三回 NAGOYA からのニッポン復活応援シンポジウム「東日本大震災を教訓にした建造物の耐震性を考える」開催：29日 護 雅史環境学研究所准教授が講演	8.13 (土)	日経 (朝刊)
89 水谷法美工学研究科教授は半田市から防災拠点予定地についての相談を受け、「設計を見直せば現在の予定地でも役所の機能が停止する事態は避けられる可能性がある」と話す	8.13 (土)	朝日 (朝刊)
90 生源寺真一生命農学研究科教授は農作物の風評被害について「安易な安全宣言では信頼されない。科学的な根拠のある説明と、徹底的な情報公開が必要」と話す	8.13 (土)	朝日 (夕刊)

博物館からのお知らせ

第21回博物館企画展

「ミクロの美術館－顕微鏡で見た人体の世界」を開催中

博物館は、9月13日(火)から11月19日(土)まで(日・月曜日休館)、第21回企画展「ミクロの美術館－顕微鏡で見た人体の世界」を開催しています。

本学は今年、創基140周年を迎えました。これは、1871年(明治4年)に当時の名古屋県が仮病院、仮医学校を開いた時から数えたもので、今回は、140周年を記念した企画となっています。

展示の中心を占めるのは、当時技官だった木戸史郎氏の描いた人体組織図で、医学部の組織学実習で使用されていました。この組織図は、解剖学教室教授だった戸狩近太郎氏によって書かれた日本初の本格的な組織学の教科書『組織学』(昭和28年刊)の挿絵としても使われており、昨年435枚の原図がデジタル化されたことに伴い、博物館に移管されました。

この他にも、明治時代の光学顕微鏡、大正時代の大型顕微鏡投影撮影装置、工学部で開発されたイオン顕微鏡、透過型電子顕微鏡の試料作成をするために世界中で使用されたウルトラマイクロトーム MT-1 型、現在、医学部で使用されている電子顕微鏡で撮影された組織の電子顕微鏡写真など、過去から現在までの「名古屋大学におけるミクロの教育・研究」に関する写真、装置などが展示されています。

ご興味のある方は、是非ご来館ください。



特別講演会

日 時：10月4日(火) 13:30～15:00
講演題目：「慢性ストレスが引き起こす細胞の過労死」
講演者：木山博資大学院医学系研究科教授

日 時：10月28日(金) 13:30～15:00
講演題目：「顕微鏡組織図－画家がみた細胞の世界－」
講演者：小林身哉金城大学教授

日 時：11月5日(土) 13:30～15:00
講演題目：「目で見る生命現象：最新の電顕技術が解き明かすミクロ(細胞)の世界」
講演者：白倉治郎エコトピア科学研究所教授

日 時：11月19日(土) 13:30～15:00
講演題目：「電子顕微鏡で観る楽しみ」
講演者：蛭薙観順博物館准教授

ギャラリートーク

日 時：10月3日(月) 13:00～(※友の会限定)
10月15日(土) 10:30～11:15、13:00～13:45

ミクロの探検隊(要申し込み)

日 時：10月1日(土) 13:00～16:00
テマ：動物組織の不思議

日 時：10月8日(土) 13:00～16:00
テマ：植物の不思議

日 時：11月12日(土) 13:00～16:00
テマ：トリの羽の不思議

開催期間：9月13日(火)～11月19日(土) 日・月曜日を除く
開館時間：10時～16時まで
入場料：無料
問い合わせ先：博物館事務室 Tel 052-789-5767

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

9月13日(火)～11月19日(土)

場 所：博物館 3階展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：日・月曜日

入 場 料：無料

博物館企画展

「ミクロの美術館－顕微鏡で見た人体の世界」

[関連講演会]

10月4日(火)、10月28日(金)、11月5日(土)、11月19日(土)

場 所：博物館 3階講義室

時 間：13:30～15:00

講演題目：「慢性ストレスが引き起こす細胞の過労死」(10/4)

講 演 者：木山博資 (医学系研究科教授)

講演題目：「顕微鏡組織図－画家がみた細胞の世界－」(10/28)

講 演 者：小林身哉氏 (金城学院大学教授)

講演題目：「目で見る生命現象：最新の電顕技術が解き明かすミクロ(細胞)の世界」(11/5)

講 演 者：臼倉治郎 (エコトピア科学研究所教授)

講演題目：「電子顕微鏡で観る楽しみ」(11/19)

講 演 者：蛭薙観順 (博物館准教授)

対 象：一般

参 加 費：無料

[ギャラリートーク]

10月3日(月)、10月15日(土)

場 所：博物館 3階展示室

時 間：13:00～ (10/3)、10:30～11:15、13:00～13:45 (10/15)

対 象：博物館友の会会員 (10/3)、

一般 (10/15)

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

9月14日(水)～9月16日(金)

場 所：国立京都国際会館

(京都市左京区宝ヶ池)

時 間：9:30～18:25 (9/14)、

9:30～18:45 (9/15)、

9:30～15:30 (9/16)

定 員：200名

対 象：一般

参 加 費：無料

グローバル COE プログラム

「地球学から基礎・臨床環境学への展開」 共催国際会議

「持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議2011」

テ ー マ：「地域からグローバルな持続可能性の構築に向けて：アジアからの視点」

[問い合わせ先]

GCOE 事務室 052-747-6521

9月21日(水)

場 所：農学部講義棟 3階第7講義室

時 間：16:00～18:00

対 象：一般

参 加 費：無料

2011年度

第5回オープンセミナー

講演題目：「ケニアにおけるイネいもち病対策：いもち病抵抗性品種の育成と
生物防除に関する共同研究」

講 演 者：キャサリン・マチュンゴ (農学国際教育協力研究センター客員研究員)

講演題目：「カンボジアにおけるトビイロウンカの発生状況の把握と
防除技術の開発に向けて」

講 演 者：ハイン・ティーダ (農学国際教育協力研究センター客員研究員)

[問い合わせ先]

農学国際教育協力研究センター

准教授 榎原大悟 052-789-4226

9月26日(月)～10月5日(水)

場 所：教養教育院

プロジェクトギャラリー clas

時 間：10:00～18:00

休 館 日：土・日曜日

入 場 料：無料

教養教育院プロジェクトギャラリー clas 展覧会

「TROPE experiments」

内 容：国内外で活躍するデザイン集団 graf が製作した、あらかじめ用途や役割の
決められていない道具「TROPE」を使い、生活の智慧に学び、工夫する
楽しさを提案。

[問い合わせ先]

教養教育院事務室 052-789-4725

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

9月27日(火)

場 所：瀬戸市文化センター
文化交流館 2階22会議室
(瀬戸市西茨町113-3)

時 間：14:00~16:00

対 象：一般

参 加 費：無料

環境学研究科しんきん環境事業イノベーション寄附講座 第2シリーズ第4回環境学公開講演会

講演題目：「里山、田んぼーいのちを育てる美しい身近な自然ー」

講 演 者：夏原由博（環境学研究科教授）

講演題目：「天気と病気」

講 演 者：佐藤 純（環境医学研究所准教授）

[問い合わせ先]

環境学研究科

しんきん環境事業イノベーション寄附講座

052-747-6550

**10月1日(土)、10月8日(土)、
11月12日(土)**

場 所：博物館実験室、野外観察園

時 間：13:00~16:00

定 員：20名

対 象：小学5年生以上、一般

参 加 費：50円

ミクロの探検隊

テ ー マ：「動物組織の不思議」(10/1)

「植物の不思議」(10/8)

「トリの羽の不思議」(11/12)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

10月1日(土)~11月6日(日)

場 所：愛知県全域

対 象：一般

あいちサイエンスフェスティバル2011

内 容：市民向け講演会、研究者と市民の対話イベント等を実施

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部

サイエンス・コミュニケーション推進室

052-747-6527



10月5日(水)、10月26日(水)

場 所：野依記念学術交流館 2階
カンファレンスホール

時 間：16:30~18:00

参 加 費：無料

グローバル COE プログラム

「分子性機能物質科学の国際教育研究拠点形成」

化学系セミナー

講演題目：「化学ツールを活用したニューバイオテクノロジー」(10/5)

講 演 者：小宮山 真氏（東京大学教授）

講演題目：「 π 電子系分子種の配列制御ー分子周りのデザイナー」(10/26)

講 演 者：竹内正之氏（物質・材料研究機構グループリーダー）

[問い合わせ先]

GCOE 事務局

gcoe-office@chem.nagoya-u.ac.jp

10月6日(木)~10月7日(金)

場 所：野依記念学術交流館 1階会議室

時 間：13:30~18:00 (10/6)、

10:00~11:50 (10/7)

対 象：一般

参 加 費：無料

第12回オープンフォーラム

テ ー マ：「途上国留学生教育の人造り・国造りへの貢献

ーアフガニスタンの復興に向けてー」

[問い合わせ先]

農学国際教育協力研究センター

特任准教授 伊藤圭介 052-788-6166

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

10月8日(土)、10月22日(土)、
11月19日(土)、12月3日(土)、
12月17日(土)、1月14日(土)

場 所：インキュベーション施設1階
プレゼンテーションルーム

時 間：10:00～

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部

ビジネス人材育成センター 052-747-6490

ビジネス人材育成センター 平成23年度後期B人セミナー

テ ー マ：「博士の就活スタート・リスタート」、
「技術経営(MOT)コンサルティング概要」、
「博士・ポスドクのための就職ガイダンス」(10/8)
「大学院生、ポスドクのためのビジネススキル入門」、
「製造業における、知財戦略と知財部門の業務内容」(10/22)
「長期インターンシップ事前研修—知的財産の取扱に関する留意点」、
「バイオ業界の現状と求められる“人財”」(11/19)
「食品業界および企業での研究開発について」、
「弁理士の業界と業務」(12/3)
「グローバルスタンダードな伝達技術とは」、
「論理的でわかりやすい伝達技術(アウトライン化)」、
「アウトライン化：事例演習と実践練習」、
「社会人に求められるビジネスマナー」(12/17)
「医薬品・医療機器産業の近未来」、「プレゼンテーションスキル研修」(1/14)

10月13日(木)

場 所：覚王山日泰寺
(名古屋市千種区法王町1-1)

時 間：13:30～

[問い合わせ先]

医学部・医学系研究科

学務課 052-744-1981

医学部解剖吊慰祭

10月14日(金)～11月4日(金)

場 所：中央図書館4階展示室、
第2展示室

時 間：9:30～17:00

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

附属図書館

事務部情報管理課庶務掛 052-789-3667

附属図書館2011年秋季特別展

「そろばんと和算書—日本の計算文化にふれる—」

[関連講演会]

10月29日(土)

場 所：中央図書館5階多目的室

時 間：14:00～16:00

講演題目：「そろばんの繪・色色」

講 演 者：藤本保紀氏(日本数学史学会会員・珠算史研究学会会員)

講演題目：「和算書と算額」

講 演 者：深川英俊(本学非常勤講師)

参 加 費：無料

10月15日(土)

場 所：東山キャンパス

参 加 費：無料

第7回ホームカミングデイ(創基140周年)

テ ー マ：「地域と大学で考える 未来を耕す『人・緑・食』」

内 容：名古屋大学の集い、学術講演会、名古屋フィルハーモニー交響
楽団によるコンサート、名古屋グランパスによるサッカー教室、
本学理系女子による科学実験など

[問い合わせ先]

総務部総務課企画調整掛 052-747-6558



名大トピックス No.220 平成23年9月15日発行

編集・発行/名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町(〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>)でもご覧いただけます。

表紙

博物館展示室

(平成23年8月23日)



113

とよだ 豊田講堂の有形文化財登録と BELCA 賞受賞

1960(昭和35)年にトヨタ自動車工業株式会社(現在のトヨタ自動車株式会社)によって建設寄附された豊田講堂は、日本建築学会賞受賞(1962年)、「都市景観重要建築物」(名古屋市)指定(1993年)、「DOCOMOMO in Japan 近代建築100」選出(2003年)と、建築物としての意匠やそれが生み出す景観が高く評価されてきました。

そして今年、豊田講堂の価値があらためて認められることになりました。

2月には、第20回 BELCA 賞(ベストリフォーム部門)を受賞しました。BELCA 賞は、公益社団法人ロングライフビル推進協会(略称 BELCA)が創設した、我が国初の既存建築物の総合的表彰制度です。選考講評では、歴史的文化的価値の高いモダニズム建築である豊田講堂に対し、外観を保全しつつ改修・増築を実施し、「建物を使い続けるという大学の明確な意思とそれに応えた技術側の努力が建築の活性化、長寿命化を実現した優れた範例である。」

と評価されています。

そして7月、「名古屋大学豊田講堂」が国の登録有形文化財となりました。この登録は、文化財保護法にもとづき、所有者の希望を受けた文化庁が有識者からなる文化審議会に諮問し、その答申をへて決定されるものです。名古屋大学としては、鶴舞キャンパスにある愛知県立医学専門学校(医学部の前身)および愛知病院(医学部附属病院の前身)の門と外堀あわせて3件(2007年)以来の登録です。

名古屋大学は、医学部の前身学校の創立(創基)から数えると140年の歴史を持っていますが、名古屋帝国大学として創立されてからは72年です。さらに創立期が戦時期から敗戦直後に重なっていたこともあって、現在のキャンパスには古い歴史的な建物がほとんど存在しません。それだけに、しかもこの創基140周年の年に豊田講堂があらためて評価されたことは、きわめて大きな意義を持っているといえるでしょう。



1	2	3
4	5	

- 1 国の登録有形文化財の登録プレート。まもなく豊田講堂に上掲される予定。
- 2 国の登録有形文化財の登録証。
- 3 5月17日にロイヤルパークホテル(東京/日本橋)で挙行された第20回 BELCA 賞表彰式において、本学を代表して表彰を受ける藤井理事。
- 4 2007年度竣工のトヨタ自動車株式会社およびトヨタグループ各社の寄附による全面改修・増築後の豊田講堂。その外観は建設当時のままに保存された。
- 5 全面改修で増築されたホワイエ(アトリウム)。これにより豊田講堂と名古屋大学シンポジオンを一体化し、それぞれの機能の活性化をはかっている。